

# 週刊紙としての『七一雑報』

笠原芳光

- 一 序
- 二 週という制度
- 三 明治維新前後の新聞・雑誌
- 四 『七一雑報』の解題
- 五 『七一雑報』の性格
- 六 『七一雑報』における社会風俗記事
- 結 週刊紙からキリスト教紙へ

## 序

『七一雑報』とはなにか。

たとえば「わが国最初のキリスト教定期刊行物。明治八（一八七五）年二月二十七日創刊（週刊誌）」といった説明がなされてきた。しかし『七一雑報』がキリスト教ジャーナリズムであることと、週刊新聞であることとの割合をくら

べると、少なくとも当初は後者のほうが大きいといわざるをえない。なお『七一雑報』は後述するように、週刊誌ではなく週刊紙といふべきだろう。

これを日本における最初の週刊紙ということはできないにしても、週刊紙であることを強く自覚し、主張している点で画期的なものである。一般の言論界ではあまり知られていないが、ここでも高く評価されるべきものといわねばならぬ。

『七一雑報』のキリスト教的色彩は、初めは薄く、しだいに濃くなっていく。それは、この国におけるキリスト教の進展を示すとともに、その細分化、専門化、固定化を表わしている。初期の『七一雑報』にはキリスト教の普及や伝道よりも、むしろ民衆への啓蒙や文明開化の精神の伝達といった意図が強く現われている。明治初年のキリスト教は宗教であるとともに、文化であり、思想であり、倫理であった。いわば未分化、混沌の精神の持つ特色と魅力が『七一雑報』、とくにその初期のものにはあるといえよう。

この小論では、そのような週刊紙としての『七一雑報』について考察するとともに、そのキリスト教性がどのように展開していったかについても論及してみたい。

## 一 週という制度

週刊紙という問題を考えるのに先立って、まず必要なことは週という制度が、いつから日本において行われるようになったかである。

よく知られているように、この国の暦制が太陰暦から太陽暦に変更されたのは明治五年（一八七二年）二月三日

であり、この日が明治六年（一八七三年）一月一日とされた。それは明治五年（一八七二年）十一月九日の「太政官布告第七百三十七号」によっている。

今般改曆ノ儀別紙 詔書ノ通被 仰出候条此旨相達候事（別紙）詔書写 朕惟フニ我国通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躡度ニ合ヌ故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率ネ妄誕無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス蓋シ太陽曆ハ太陽ノ躡度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖トモ季候早晚ノ變ナリ四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟タサルナリ依テ自今旧曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其ノ斯旨ヲ体セヨ 明治五年壬申十一月九日

一 今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付来ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事 但新曆鑿板出来次第頒布候事  
一 一ヶ年三百六十五日十二ヶ月二分ヶ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事〔以下引用省略〕

この太陽曆とともに週の制度が決められ、七曜が定められた過程は詳らかではないが、日曜日が休日であるという意味の言葉はすでに明治五年（一八七二年）九月八日の「文部省布達番外 小学教則」に用いられている。それによると「小学」と呼ばれた小学校に上等と下等を設け、下等小学の課程を八級に分け、毎級六箇月の習業とし、第八級から入学して、順次進んで第一級に至るといふシステムになっている。そして最初の「第八級六ヶ月」における教科の説明の前に「一日五字一週三十字日曜日ヲ除ク以下之ニ做へ」とある。これが学校における日曜休日を示す最初の法律文書と考えられる。

しかし、その日曜休日は明治六年（一八七三年）三月二日の「文部省布達第二十一号」によって改正され、一六の日、すなわち月の内、一のつく日と六のつく日を休日とするという江戸時代以来の制度にいったん逆行する。その布

達には「小学教則中日曜日ヲ以テ休業ノ儀記載候処今般改正一六ノ日ヲ以テ休暇ト相定候条此旨相違候也但月末三十日一休無之事」とある。

それが再改正されて日曜日となったのが明治九年（一八六七年）三月一二日の「太政官達第三十七号」である。

「従前一六日休暇ノ処来ル四月ヨリ日曜日ヲ以テ休暇ト被定候条此旨相違候事 但土曜日ハ正午十二時ヨリ休暇タルヘキ事」。この達によって週の制度は正式に制定されたとみてよいだろう。

西洋における週の制度の起源は定かではないが、すでに古代アッシリアで紀元前七世紀頃、毎月、七日、一四日という七の倍数の日は働くことを禁ぜられていたという。また古代イスラエルにおいてもモーセの十戒の第四戒に「安息日を憶えてこれを聖潔すべし。六日の間勞きて汝の一切の業を為すべし。七日は汝の神エホバの安息なれば何の義務をも為すべからず。汝も汝の子息息女も汝の僕婢も汝の家畜も汝の門の中に在る他国の人も然り。其はエホバ六日の中に天と地と海と其等の中の一切の物を作りて第七日に息みたればなり。是をもてエホバ安息日を祝ひて聖日としまふ」とあるのに基いて、第七日すなわち土曜日を安息日として守っていた。

それがキリスト教においては、イエスが復活したのが日曜日であるとされたことから、日曜日を聖日や休息日と考えるようになり、キリスト教が世界宗教となるに及んで日曜日が世界的に普及したことは周知のとおりである。

また週の内容である七曜といわれる七つの曜日の起源は古代バビロニアの占星術によっている。それは唐の時代に中国に渡り、平安時代には日本にも伝えられた。そして現在とは異なる用法ではあるが、七曜の名称は明治九年の日曜休日の制定によって完成されたと考えられる週の制度の実施以前にも用いられていた。

ともあれ「七一雑報」は明治八年（一八七五年）一二月二七日の創刊であるから、日本における週の制度が公式に

定められる四箇月余りも前に登場したことになる。

## 二 明治維新前後の新聞・雑誌

『七一雑報』は明治初期の週刊の新聞であるが、これを雑誌に分類している研究書もあり、ここで明治維新前後の新聞・雑誌について概観しておきたい。

およそ日本における最初の新聞はなにか。この問題は複雑であるが、多くの研究書は「新聞」という名称を持つものとしては、文久二年（一八六三年）一月創刊の『官板バタバヤ新聞』であるという。これはバタバヤのオランダ総督府から幕府に献せられた機関紙『ヤバツシェ・クーラント』の抄訳であり、「外国記事」と題した国別記載のニュースを洋書調所にいた柳河春三らが翻訳し、半紙二つ折、五、六葉を一冊として木版で印刷し、万屋兵四郎が発行したものである。この新聞の初号は巻一と称し、文久元年（一八六一年）八月三十一日、太陰暦では七月二十六日の発行であり、二号は二巻といい、同年九月四日、太陰暦では七月三〇日の発行、三号は三巻で同年九月七日、太陰暦では八月三日の発行というように不定期刊行であった。<sup>12)</sup>

当時の新聞は、このように不定期刊行のものが多く、わが国における日刊紙の最初は明治三年（一八七〇年）二月八日に創刊された『横浜新聞』である。これは翌明治四年（一八七一年）四月から『横浜毎日新聞』と改題されたが、鉛活字を用いた洋紙一枚摺のもので、陽其二、子安峻らの編輯発行によっている。<sup>13)</sup>

雑誌について、この雑誌という言葉はもとは定期刊行物のことではなく、江戸中期の文人柳沢棋園の著『雲萍雜誌』のように随筆集の意味に用いられた。それがオランダ語の *magazin* の訳語として用いられたのは慶応三年（一

八六七年)一〇月に柳河春三が創刊した『西洋雑誌』である。この雑誌は明治二年(一八六九年)九月に廃刊されたが、近代日本最初の雑誌といわれている。<sup>14)</sup>

当時は明治四年(一八七一年)五月に木戸孝允によって日新堂から創刊された『新聞雑誌』のように雑誌という名の新聞があり、<sup>15)</sup>また逆に明治六年(一八七三年)一月に集英堂から創刊された『評論新聞』のように新聞という名の雑誌もあった。<sup>16)</sup>もっとも新聞と雑誌の区別はどこでつけるのか難問である。一応、ページ数が少なく、報道記事が主であれば新聞、ページ数が多く、論文、批評、創作などが中心であれば雑誌、という程度のことしかいえない。ページ数の多い少ないの判断は難しいが、当時では一桁と二桁の違いという程度だろう。また日刊新聞が普及した段階では新聞というのは日刊であるという理解ができたが、これも一応のものといわざるを得ない。

ところで『七一雑報』は新聞だろうか、雑誌だろうか。明治二年(一八七九年)六月に発行された『出版書目月報附録―新聞紙雑誌雑報一覽』によると雑誌に分類されている。<sup>17)</sup>また昭和三年(一九二八年)に発行された『明治文化全集』第一八巻に明治初期の代表的な新聞・雑誌が抄録されていて、そのなかに『七一雑報』の第一号と第二号が載っており、解題の部分に「七一雑報解題」を今中次麿が書いている。これは短いものだが、『七一雑報』の解題としては最初のものと考えられ、そこには「新聞型のもの」と断りながら、「我国のキリスト教の新教徒によって計画された最初の雑誌」とある。そして山本文雄著『日本マス・コミュニケーション史(増補)』によると、前記今中の解題によったのか、『七一雑報』はわが国最初のキリスト教雑誌で新教徒によって編集された<sup>18)</sup>となっている。小論の冒頭に引いた『キリスト教大事典』の記述にも「週刊誌」とあり、従来は雑誌と考えられていたようである。しかしページ数が当初四ページ、のち八ページで少なく、内容にもかなり報道的記事があるので、ここでは『七一雑報』を

新聞と考えていきたい。

ところで『七一雑報』は明治八年（一八七五年）一二月に創刊された週刊新聞であるが、明治の初期にこれよりも早く創刊された週刊紙にはどのようなものがあったかについて言及しておきたい。『日本近代史辞典』の「付録29 明治主要新聞・雑誌一覧」<sup>(20)</sup>によって、新聞か雑誌かの区別は判然としないが、「刊行形式」が「週刊」となっているものさあげると、“Japan Weekly Mail”（発行地横浜、創刊明治三年）<sup>(21)</sup>、“Nagasaki Express”（発行地長崎、創刊明治三年一月）<sup>(22)</sup>、『翻訳新聞紙』（発行所東京信報堂、内容翻訳、創刊明治六年一月）<sup>(23)</sup>、『東京新報』（発行所東京虎心堂、内容時事、創刊明治六年二月）<sup>(24)</sup>、『英政新聞』（発行所東京英政新聞社、内容翻訳、創刊明治六年九月、廃刊明治六年十一月）<sup>(25)</sup>、『共存雑誌』（発行所東京曙新聞社、内容学術論説、創刊明治八年九月、廃刊明治一三年五月、重要関係者大内青巖）である。そして、この表には『七一雑報』は記載されていない。

また、さきにあげた『出版書目月報附録―新聞紙雑誌雑報一覧』には、序文に「(各府県下ノ)新聞紙及ヒ雑誌雑報歳月ヲ逐テ増殖シ現今世ニ行ハル、モノ全国ヲ挙テ無慮百種ノ多ニ至ル故ニ部門ヲ設ケ之ヲ類集シ出版月報ノ号外トナシ以テ公示ス爾後其改題廃業若シクハ新ニ発行スルモノハ時々月報ノ末ニ附録スヘシ 明治十二年六月卅日」<sup>(26)</sup>とあり、明治一二年（一八七九年）六月の時点で発行されている新聞と雑誌が表になっている。そのなかで週刊とされている新聞・雑誌をあげてみよう。ここには紙・誌名、日・週・月刊などの別、発行地・発行所が記されているが、新聞と雑誌の区別、創刊年月、体裁、内容などは無記である。従って明治一二年六月段階で発行されているということしかわからない。

「回天新報 毎週一号 大阪東区安土町一丁目廿三番地 回天社」  
 「小学新誌 毎週 信濃国水内郡徳間村第三十一番地 有朋

社」一七一雑報 毎周<sup>(7)</sup> 摂津国神戸山手通六丁目一番地 雑報社」一興隆雜誌 毎周<sup>(7)</sup> 西京下京区花屋町新町西東松屋町八百九番地 興隆社」一大阪出版物価新報 日曜日 大坂東区平野町二丁目卅七番地 娑業社」一月桂新誌 毎週 信濃国松本北深志町三番町二百四十九番地 月桂社」一東京新誌 土曜日 京橋区元寄寄屋町二丁目一番地 九春社」一団団珍聞 土曜日 神田雉子町三十二番地 団々社」一日本一誌驥尾団子 水曜日 神田雉子町三十二番地 団々社」一月とスッポンチ 金曜日 神田区神田仲町二丁目十三番地 興聚社」一青柳新紙 月曜日 尾張国名古屋区宮町二丁目愛岐日報社内 青柳社」一鳴門そうし 日曜日 阿波国徳島大工町二丁目二百九十五番地 楽々館」一我楽多珍報 金曜日 西京寺町通高辻上ル 京都日日新聞社」

これらの史料から『七一雑報』以前に創刊の週刊紙誌は六紙誌、またはそれ以上ということになる。もっとも、これらの新聞・雑誌の原本に当たっていないので、これらの史料の記述が正確であるかどうかは不明である。

なお従来、日本における週刊紙の最初は明治一二年(一八七九年)創刊の『東京経済雑誌』であるという説が、いくつかの事典の「週刊誌」という項目に記されていることに關して一言しておきたい。たとえば『マス・コミュニケーション事典』には植田康夫の筆で「わが国最初の週刊誌は田口鼎軒が一八七九年一月に創刊した『東京経済雑誌』である。だがふつう週刊誌といった場合、その原型は一九二二年四月二日号から二誌同時に創刊された『週刊朝日』と『サンデー毎日』に求められる」とある。また『出版事典』には筆者無記名で「わが国では欧米にくらべて八週<sup>(8)</sup>の觀念の導入が遅れていたために、経済専門の週刊誌を除けば、本格的な一般週刊誌の出現が比較的小そく<sup>(9)</sup>とある。そして『国民百科事典』には紀田順一郎の筆で「日本では一八七九年に田口卯吉が『東京経済雑誌』を創刊したが、今日の週刊誌の基礎を築いたのは『週刊朝日』と『サンデー毎日』<sup>(10)</sup>とある。

そこで『東京経済雑誌』の原本を調べたところ、この雑誌は鼎軒田口卯吉が主筆となつて経済雑誌社から明治一二年(一八七九年)一月に創刊されたが、当初は月刊雑誌であることがわかった。そして同年八月から月二回刊となり、



明治一三年（一八八〇年）六月から旬刊になり、そして明治一四年（一八八一年）七月から週刊となっている。それまでは純粹の經濟雜誌であったが、週刊になった最初の明治一四年七月二日の第六七号には「陳言一則」と題して「維れ明治十四年七月我が經濟雜誌は初めて政治文學其他一般の事實をも報道するの一週報となりけり」とある。もっともその後、必ずしも「一般の事實」の「報道」が多くなつたとはいえない。

この雜誌のページ数は最初から三五ページあり、体裁はB5版、すなわち縦二五・七センチメートル、横一八・二センチメートル、今日の週刊誌と同型であり、明治一四年七月以降は確かに週刊雜誌である。さきにあげた明治初年の週刊紙・誌の内、ページ数や内容からいって週刊誌といえるものがあるかどうか、実物を見ないと断定できないが、もし雑誌というにふさわしいものがなければ、やはり『東京經濟雜誌』が日本最初の週刊誌であろう。

### 三 『七一雑報』の解題

ここで『七一雑報』の書誌的な問題について解題をのべておきたい。

『七一雑報』は明治八年（一八七五年）二月二十七日、月曜日に創刊された。創刊号の奥付によると、発行所は「神戸中山手通六丁目一番 雑報社」とあり、発行人は「社長兼印刷 今村謙吉 編輯長 村上俊吉」となっている。また「売捌所」として「大阪博労町四丁目三拾八番地 浪花新聞社 東京小伝馬町三丁目馬屋新道 吉岡重治郎 西京三条小橋上ル木屋町 元井清兵衛」とある。また価格は「本社新聞定価」として「一 壹枚 貳錢 一 六ヶ月前金 四拾錢 遠國運送之分ハ此外ニ郵便税申受候 出版ハ一周間ニ一度ツ、」とある。体裁はほぼA4版、すなわち縦二九・七センチメートル、横二一センチメートルであり、ページ数は四ページである。

創刊の辞ともいふべき「口上」があり、そこには「私し共此度七一雜報といふ新聞を出版せんと志ざせしに既に官許を得たれば今試みに第一号を刷行し第二号よりは年を改ため第一月中旬を始めとし毎週一度出版致し広く諸人の求めに備へんことを冀ふ 社長敬白」とある。ここからわかるように、正確にはこの新聞は明治九年（一八七六年）一月一三日木曜日発行の第二号から週刊になる。また二号には「本社新聞定価第一号は一枚二錢六ヶ月四十錢と認めましたが少し仲間の評議が落付ませなんだゆへ此度左の通り改定めました 社長敬白」として、「一 壹枚 壹錢五厘 一 六ヶ月前金 三拾錢 但シ遠国ハ郵便料共六ヶ月五十六錢 一 半ダース 六ヶ月 壹円五拾錢 但シ遠国ハ郵便料共六ヶ月二円」とある。

明治九年一月二一日付の第三号からは金曜日の発行となり、終刊に近い明治一六年（一八八三年）六月二一日付の第八卷第二三号から火曜日の発行となり、同年六月二五日付の第八卷第二五号の終刊に至っている。ページ数は明治九年七月七日の第二七号から八ページになり明治一六年六月二二日の第八卷第二三号から終刊までの三号は再び四ページに減少している。

定価は明治一五年（一八八二年）一月六日の第七卷第一号から「一枚三錢 遠国通送ノ分郵税共四錢 六ヶ月前金七十錢 遠国通送ノ分郵税共九十錢」と改定された。そして終刊前の六月二一日号から三号は四ページ減少に伴い、定価も一枚一錢五厘に戻っており、発行所も「神戸栄町三丁目十七番地 福音社」に変更されている。

また社長は終始今村謙吉であるが、編輯長は明治一四年（一八八一年）二月二日の第六卷第四八号までは村上俊吉、同年二月九日の同卷第四九号からは竹村和民となり、さらに明治一六年五月一八日の第八卷第二〇号から終刊まではまた村上俊吉となっている。

ここで『七一雑報』の主要関係者についてのべておきたい。まず社長兼印刷人であった今村謙吉は天保一三年（一八四二年）、金沢に生まれ、慶応義塾に学び、英語教師ののち大阪府庁土木課に勤め、宣教師O・H・ギューリック（Oramel Hinckley Gulick）に出会い、摂津第二公会（のちの日本組合大阪基督教會、現在日本基督教団大阪教會）でギューリックから受洗、翌年、摂津第一公会（のちの日本組合神戸基督教會、現在日本基督教団神戸教會）に転会。実質上の主筆ギューリックを助けて、『七一雑報』の社長となり、印刷部門を担当。廃刊とともに大阪へ移り、『七一雑報』を改題した『福音新報』の発行に当り、やがて大阪活版営業組合長となり、明治三十一年（一八九八年）東京で死んだ。

つぎに編輯長の村上俊吉は弘化四年（一八四七年）江戸麻布の福地家に生まれ、摂津国三田藩士村上恒庵の養子となった。摂津第一公会で宣教師D・C・グリーン（Daniel Crosby Greene）から受洗、ギューリックが『七一雑報』を発行するに当って編輯長となり、とくにJ・バニヤン（John Bunyan）作の小説『天路歷程』（The Pilgrim's Progress）を初めて日本語に翻訳し、連載した。その間、摂津第四公会（のちの日本組合兵庫基督教會、現在日本基督教団兵庫教會）と摂津第三公会（のちの日本組合三田基督教會、現在日本基督教団摂津三田教會）の牧師を務め、前記『福音新報』の編輯にも当り、さらに日本組合須磨基督教會（現在日本基督教団須磨教會）を創設し、大正五年（一九一六年）に死んだ。自伝『回顧』がある。

また途中で五箇月余り編輯長を務めた竹村和民はのちの浮田和民である。安政五年（一八五九年）熊本生れ、熊本洋学校に学び、熊本バンドの一員となる。同志社英学校を卒え、同志社法政学校教授、上京して東京専門学校（現在早稲田大学）教授となる。法学博士、政治学者として多元的国家論の立場に立ち、綜合雑誌『太陽』の主幹も務め、昭和二十一年（一九四六年）死んだ。『社会学講義』『政治原論』などの著書がある。

この他、摂津第一公会の創立会員であつた前田泰一もスタッフの一員であり、蘇峰徳富猪一郎も一時、ここで働いたことがあり、またのち警醒社書店主となつた福永文之助も勤務していた。これらの日本人を使って、実質上の主筆であつたのは米國伝道會社 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) 派遣の宣教師 O・H・ギューリックであつた。ギューリックは一八三〇年 (天保元年) 米國に宣教師の子として生まれ、オアフ大学に学び、宣教師として来日、一時帰國後、神戸の中山手通に住み、『七一雑報』を創刊し、終刊後は新潟、岡山、熊本で伝道、二一年間在日し、一九二三年 (大正二年) ハワイで死んだ。

ここで『七一雑報』の終刊事情についてのべておきたい。明治一六年 (一八八三年) 五月二五日の第八卷第二一号に「七一社告」として、つぎのような文章が載つた。前後を省略して中程の要点を引用する。

其間我基督教の日々に進歩するに從がひ本紙の体裁も漸次改進し稍高尚の域に赴きたり然れども福音の傳播教理の發達ハ愈進んで止まず上下等社会の別なく基督教の何者たるを探索せんとする者陸續現出し加之基督教徒中にも知識学芸に富るの士所々に輩出し教会の面目も大に前日と異なりたるが如し此時に当り教友三四の發起にて東京に警醒社なるものを設置し基督教の精神を基礎として東京毎週新報の名をもつて上下に通ずるの一大新聞を起し傍ら教に関するの著書事業をも開きて大に基督教の真理を拡張し社会文明の増進を企図せらるゝに遇へり是に於て我儕も亦少しく本紙の体裁を改め題号を變更し社の組織を改革し彼是合一して以て信徒の便益教の拡張を図らんと思考を廻らせる折柄偶々新聞条例の改まるありて之が爲に七一雑報の改革をも促されたれバ今般我儕共議を遂げ七一雑報ハ爾來アメリカンボードの管理を脱し題号を福音新報と改ため雑報社を廢し福音社に於て同新紙を発売し彼の高尚なる理論深奥なる學術の如きハ之を東京の警醒社に譲り当地福音新報に於てハ専ら諸会の報道並に信徒の美事善行と其家庭の教訓となるべき者を掲げ其文章を平易にし童蒙婦女と雖ども容易に読且解し得べく爲さんとの趣向にて今其出題中なれば許可を得るの日より右の如く題号並に体裁を改ため毎週一度陸續発売し江湖諸彦の賢覧を辱ふせんことを冀望することなり

続いて同年六月一日の第八卷第二二号には「社告」として「本紙二十一号に於て既に陳述候如く七一雑報ハ福音新

報と改題仕少しく紙面並に体裁等も相改候積にて方今出願中に候へば七一雑報ハ二十二号を以て相止め二十三号よりハ福音新報の名を以て発兌仕度若し次の金曜日迄に許可無之候節ハ一二回休業候哉も難斗此段廣告仕候」とある。

しかし次の六月一二日の二三号には再び「社告」として「前号に題号変更の許可相済候迄ハ休業可致旨廣告仕候得共其後教会の報道続々有之若此俟永引候節ハ原稿陳腐と相成候のみならず看官諸君の御不便を来さん事を恐れ矢張七一雑報の名を以て新規体裁の小新紙を出版仕候間福音新報と改題候迄福音新報の積にて御覽被下候ハゞ幸甚」とある。そして六月一九日に第二四号、六月二六日に第二五号を出して終刊となる。その後は同年七月三日から『福音新報』と改題され、大阪に発行所を移して、同様の週刊紙として発行される。そして明治一九年（一八八六年）三月一日からは『太平新聞』と改題されて日刊紙となるが、一箇月で廢刊される。<sup>28</sup>

『七一雑報』の終刊の理由はいま見てきたところでは伝道の進展に伴い、キリスト教そのものを求め、教会に関する情報を欲する人々が増加したからだといふ。しかし村上俊吉の自伝『回顧』にはつぎの一節がある。

借僕が神戸に歸つた後に、七一雑報の發行人である、オ、エツチ、ギユリキ氏が、新潟に行くやうになつたので、七一雑報は廢刊となつた。然しながら七八年間七一雑報に由て、印刷事業の經驗を積んだ今村謙吉氏は、其少し前から福音社と号する合資会社を組織し、元町に聖書と類書の小店を開き、山手で印刷製本の事業を為てゐたので、七一雑報廢刊と同時に、同会社を大阪に移転する事に決し、七一雑報の代に福音新報と稱する週刊の小新聞を發行して、其編輯を僕が負担することゝなつた。蓋し大阪に、オ、エツチ、ギユリキ氏の舍弟<sup>かぢ</sup>ジョン、ギユリキ氏が居つて、兄の事業を引受けたからである。<sup>29</sup>

○・Hギューリックはなぜ神戸から新潟に行くことになつたのだろうか。さきの「七一社告」文中の「アメリカンボードの管理を脱し」といつたあたりから推測して、村上日本人の社員と意見が合わなくなつたということも考えられる。○・H・ギューリックは後述するように、当初は文明開化や啓蒙をキリスト教化とともに重視していたが、

社内では日本の近代化が急速に進展することによって、文明開化はすでに普及し、『七一雑報』はむしろキリスト教専門の新聞にしたほうがよいという意見が強くなったとも考えられる。

#### 四 『七一雑報』の性格

ところで『七一雑報』発刊の意図はなんであったのか、また当初の思想や性格はどのようなものであったかについて考えてみたい。

はじめにのべたように『七一雑報』はキリスト教ジャーナリズムであるとともに週刊紙であり、少くとも初期においては後者の性格のほうが大である。そのことは紙面から判断されるだけでなく、発刊の意図からも窺うことができる。まず、なによりも『七一雑報』という名称が「七日に一回発行される種々雑多な報道」という意味を端的に表わしている。のちにこれを改題した『福音新報』がキリスト教の新聞であることを明確に示しているのと対称的である。『七一雑報』はその名称からして週刊紙であることを強く自覚し、主張しているといわねばならない。

そのことは、この新聞の実質上の企画者であり、主筆であったO・H・キューリックが記しているところからも十分に知ることができる。米国伝道会社から巡遣された宣教師であったキューリックは『七一雑報』が創刊された翌月、明治九年（一八七六年）一月に「神戸中山手通一番地」から、在日宣教師達に回送されたと思われる印刷された書簡をボストンの米国伝道会社本部のN・G・クラーク(N. G. Clark)にも宛てて送附している。そのなかにつきのようない節がある。

私達は『七一雑報』(Shichi Ichi Zappo)へ毎週の使者(Wekely Messenger)とらう形式の新聞(Newspaper)を発行し始

めました。それは教育的であるように企画されており、啓蒙(enlightening)・文明化(civilizing)・キリスト教化(Christianizing)のそれぞれをうまく組みあわせた影響をこの国に与えようとしたものです。一般社会の(secular)問題と同様に宗教的な問題に関する国内および海外の情報を読者に提供するのが私達の目的です。私達はこの週刊紙(Weekly Sheet)をキリスト者の家庭におけるよき教師や伴侶、さらに紳士や知識人と同様に一般職業人にも喜ばれる訪問者としてと努力しています。私達は記事の書きかたがすべての人々に容易に理解されるよう心掛けています。<sup>28)</sup>

この手紙のなかで重要と思われる事柄を二、三指摘したい。まず『七一雑報』の読みかたは「しちいちぎっぽう」であることが明記されていることである。従来、「ひちいちぎっぽう」とか「なないちぎっぽう」とか読まれる場合もなきにしもあらずであったが、文中のローマ字表記によって題名の読みかたは確定されたといえる。

つぎに『七一雑報』の刊行の意図がこの国に対する啓蒙、文明化、キリスト教化であると書かれていることがある。事実、初期の『七一雑報』には毎号、巻頭に西洋の文物の紹介が挿絵入りで載せられており、それは百科全書的といってもよいほどである。まさに明治初年の文明開化、啓蒙主義の風潮に見あう記事といえよう。そして啓蒙、文明化、キリスト教化という言葉の順序にも、キリスト教伝道よりも、むしろ近代文明への啓蒙を優先する意図が窺われる。

さらに記事の書きかたをだれにでも理解されるように平易を旨としているということも特色の一つである。漢文体や漢語調がまだ優勢であった明治初年に口語に近い文体を採用していることは、その意図の表われである。そのことは『七一雑報』の明治十一年(一八七八年)五月三日号の「社告」に「此新聞は重おもに下賤の人にも読み得るゝ事を望むなれば投書の読者は成るだけ仮名まじりの安き文章にて願ひたく尤も論意によりてハ漢字でなければ不都合の場合も之あるべければ必ず仮名文とかぎるにハ候はねど諸君も七一雑報のために筆を執たまふ時ハ我国に文字ある人の

寡きことを忘れたまふな」と投書者に向けて記しているところからも知られる。

またO・H・ギューリックが米国伝道会社本部のN・G・クラークに宛てた書簡の内、明治八年(一八七六年)一月一八日付のものによると、「私達の小さな日本の週刊新聞(Weekly newspaper)はかなりうまくいっています」「これは日本における最初のキリスト教新聞(christian newspaper)だと確信しています。第一号は一九〇〇部、第二号は一四〇〇部印刷しました」とある。ここからギューリックは『七一雑報』を雑誌ではなく新聞として、週刊誌ではなく週刊紙として定義していることがわかる。

なお、これよりさき、ギューリックが明治八年(一八七五年)六月一〇日に、おなじクラークに宛てた書簡には「この事業のために一五〇〇ドルを請求したいと思えます」とあり、『七一雑報』発行の資金が米国伝道会社から出ていることがわかる。

ところで前述のように『七一雑報』の奥付には社長兼印刷人として今村謙吉、編輯長として村上俊吉の名前だけがあげられているが、これはこの新聞を日本人に普及させるための配慮ないし政策であったと考えられる。さきの書簡から窺われるように、『七一雑報』を企画し、推進したのはO・H・ギューリックであり、援助したのは米国伝道会社であった。

そのことはオーティス・ケリー(Oris Cary)の『日本キリスト教史』(A History of Christianity in Japan, 1909)にも「一八七五年二月二十七日に最初のキリスト教新聞が出現した。それは『七一雑報』(Shichi Tahi Zappo)〈週刊新聞(Weekly News)〉という名称で、米国伝道会社の牧師O・H・ギューリックによって編輯されていた」と記されていることからも知られる。



また植村正久が『福音新報』の明治三十一年（一八九八年）八月二十六日の第一六五号に記した「基督教徒の新聞雑誌及び其の記者」にはつぎのような『七一雑報』への言及がある。

余輩の記憶する所に拠れば、基督教の新聞として最も早く現はれしものを神戸の「七一雑報」とす。其の第一号より久しき間、「編輯長」として署名せし村上俊吉氏は、基督教徒間新聞記者の先鋒なり。余輩は此の元老の存在を忘るまじきことなり。當時の雑報は、全く外国人の補助と指揮との下に成り立ちしことなるが、其の紙面には世間の人々が斯かることに未だ注意せざる以前、既にベリー氏の家屋改良談、衛生論等、其他ソップの作り方、ビーフ・チーの煎じ法に至るまで、或時は図を挿入するなどして、之を説きしことあり。

さらに徳富蘇峰の『蘇峰自伝』にもギューリックが主になってやっていたことを体験的に記した一節がある。

斯くてぶら／＼してゐても致方はないと云ふ事にて、新島先生と相談の上、愈々神戸なる「七一雑報」の編輯を手伝ふ事となり、先生の紹介にてそれに赴いた。それは明治十二年の春であつたかと思ふ。「七一雑報」は前に申す通り、毎週一回の雑誌にて、当時宣教師 O・H・ギューリック氏 (O. H. Gulick) が引受けて居た。その印刷人は今村謙吉氏、その編輯者は村上俊吉氏であつたと覚えて居る。予は取敢へず今村氏の宅に寄留する事となり、其処よりギューリック氏の宅なる編輯局に通ふこととなつた。當時の神戸は纔かに海岸通りに町があつたばかりで、山手通りは、半ば野原や田畑であつた。今村氏の家は、中山手通であつたと覚えてゐるが、其処から諏訪山の麓迄は、散歩するには極めて適當であつた。予は一日か二日ギューリック氏の許に出掛け、極めて平凡なる翻訳を手伝つたが、余りに莫迦莫迦しいから嫌氣さし、早速京都に立還つてしまつた。

そしてなによりも當時の編輯長村上俊吉のつぎの証言は決定的である。

明治八年の一月神戸に於て初めて基督教の雑誌七一雑報の発行を見るに至つたが、之れは主に「アメリカン・ボート」宣教師の企図に因るもので、オーエツチ・ギューリキ氏主任の下に、今村謙吉氏は社長として、印刷一切を引受け、僕は編輯を担当したのである。七一雑報発行當時は、他に同種類の新聞一枚もなく、同八年より十六年に至るまでは、独舞臺の基督教新聞として、各派の購読を得たのである。

しかし考えてみれば、ギューリックが主になっていたから、『七一雑報』にはあれだけの西洋文物や海外事情に關する豊富な記事が載つたのである。当初、紙面において優勢であつた啓蒙や文明化の思想がしだいに薄れて、キリスト教色が強くなつていったのは時代思潮でもあるとともに、日本人のスタッフが文化よりもキリスト教を重視する傾向にあつたからではないか。ギューリックの意図は文化と宗教との接点を知らせることにあつたと思われ、その意図が直接的な形でなくとも継承されなかつたのは惜しまれる。これはただ『七一雑報』のみの問題ではない。日本のキリスト教全体の問題である。

## 五 『七一雑報』における社会風俗記事

今まで見てきたように『七一雑報』は明確な週刊紙である。そして週刊紙と週刊誌がページ数の多少や報道的記事の多寡による程度以外に嚴密な区別はできないこともすでにのべたとおりである。

大正一一年（一九二二年）四月に『週刊朝日』と『サンデー毎日』が創刊されて以来、週刊誌というもののイメージがつくられ、それは戦後のいわゆる週刊誌ブームによって確立された。その週刊誌の特性とは社会風俗的な話題に富んでいることといつてもよいだろう。それは社会や人生の表面や大通だけでなく、むしろ裏面や間道の問題を好んでとりあげる傾向といつてもよい。

そのような週刊誌性は明治初年のジャーナリズムのなかにすでに見られ、その顯著なものには、たとえば明治一〇年（一八七七年）三月に野村文夫によって創刊された『まるまるちんぱん团团珍聞』のように諷刺を専門とする雑誌もあつた。一般の新聞にも社会風俗の話題はかなり載つており、『七一雑報』における社会風俗の記事にはそれら一般紙からの引用、転

載も少くない。『七一雑報』は題名どおり、雑報性に特色があり、しだいにキリスト教色が濃くなるけれど、最後まで社会風俗に関する雑報は続けられ、いわゆる週刊誌的な特徴が維持されていく。

また文明開化への啓蒙を目的とした西洋文物の挿絵入りの紹介も『七一雑報』の大きな特色である。創刊号の「ガラスのはなし」、第一号の「電信機の説」、第四号の「スエス地峡のはなし」、第八号の「軽気球（風船）のはなし」といったように続く百科全書的な記事も、のちの週刊誌の一つの要素といつてよいだろう。

ここでは『七一雑報』の週刊誌性をよく表わしている社会風俗記事について、そのいくつかを例示して論評してみよう。また、そこには『七一雑報』がキリスト教紙でもあるという性格が、教訓をつけ加えたり、倫理的に解釈するという形で表われており、一般の週刊誌とは違った特色を示していることにも注目したい。

第三四号（明治九年八月二十五日）の「雑報」欄に「人殺のはなし」というのがある。但馬国出石の内藤末吉という十六歳の男は久美浜の学校授業生であったが、同僚の河井某と喧嘩をして、河井の片腕を斬り落したところ、河井に首を斬る力はないだろうと罵られたので、「彼の末吉は又かの刀を振りあげて当道河井を真二つに斬りころしたが末吉の無法なるは悪むべきことなれど河井ががいに遇ふも自分から速いた禍なりと同県某の報知なりと横浜新聞に見えましたが慎むべきものは怒でござひます之が人ごろしの指揮官でありますからサ」とある。

「学校授業生」というのは小学校教員の一種と思われるが、それが刀で相手の腕や首を斬るといふのは封建時代の名残を感じさせる。そして怒りが殺人の指揮官であるという結論は内面的な解釈でキリスト教的といつてよい考えかたである。

第三六号（明治九年九月八日）の「雑話」欄には「水死のはなし」という記事がある。「神戸の港にて毎も蒸気船が入

こむ時はかならず居留地の牛屋連中が先をあらそひ其船へ漕つけるの規則であります」という書出しで、九月四日午前九時頃イギリスのベンゴル号が入港した時にクメソンという牛肉屋が、先を争って汽船に近づき、大波に吞まれ行方不明になったとある。そして最後に「見て来た人のはなしですが何といつて評しませふか利を見て死せしは知恵なきなりとでも申ませふ」とある。これは雑報社の近くの外国人居留地にあった外国人の牛肉屋が外国船の入港時に争って肉の売り込みをしていた当時の習俗をよく描いており、『七一雑報』ならではの記事である。最後につけ加えられた教訓がこの新聞の倫理観をあらわしているといえよう。

第二巻第一八号（明治一〇年五月四日）の「雑報」欄の「遺失物のはなし」を全文引用しよう。

近頃東京にて或人が金壹万二千三百円の貸金証書と正金七十円とを取落したと申すことですが之ハ大分珍らしひ落し物だと思つて友達に咄すと其友達のいふにハイヤ夫よりもまだ珍らしひ落物がある去年芸州の或る旅籠屋にて最とも字文のある大先生が酒の興につて酌取女子にたはむれ追廻る標子に誤まつて二階の最高から真さかさまに身体を下に取落して帰らぬ旅をいたされたと咄しましたが此頃ハ花見や遊山の流行ころなれば皆さん頓でもなひ落し物をせぬように御用心なさるまし総じて落し物は放心から起るものです。

ここにはある学者が酒に酔つて女性を追いかけ、二階から落ちて死んだという事故が諷刺的に書かれており、この新聞の読者層に庶民大衆を想定し、意識した記事といえよう。いわゆる民衆がどれだけ、『七一雑報』を購読していたかはわからぬが、少くとも大衆へのアピールを心掛ける意図があったことがわかる。ここにも教訓的な結論がつけられている。

第三巻第一六号（明治一一年四月一九日）の「雑話」欄に「珈琲のはなし」がある。これは「コーヒーとはなにか」ともいふべき文章で、百科事典的な記事である。その冒頭はつぎのようになっている。

コヒイハ飲物にして朝飯の時之を用るを常とす然れども幼き子供にハ之を飲事を許さず只水と牛乳のみを以て育つる事なり子供  
の透明なる眼光と薔薇の如き顔色ハ全く水と牛乳を充分に吞むことによりてなれハ幼な子にコヒイを与ずして生長の時を待てと教  
ふるも理あることなり

コーヒーを説明するのに、まず幼児に与えないように注意するところに、まだコーヒーが普及していない当時の状  
況がよくあらわれている。ちなみに日本でコーヒーが初めて発売されたのは明治八年（一八七五年）一月、横浜であっ  
たという。また喫茶店の最初は明治二十年（一八八八年）四月六日、東京上野黒門町に開店された可否茶館であり、  
コーヒー一杯一錢五厘であったといわれる。

「珈琲のはなし」は続いてコーヒーの樹、花、実の説明、その実の収穫、乾燥、脱穀などについて記しているが、  
そのなかにブラジルにおける収穫風景を記した「コヒイを摘採ときハ男女の別なく働人ハ家を出て各自に浅き草もて  
編たる盆の如きものを携へ或ハ之を肩に掛け又ハ腰に繋ぎ幼き女兒も細き盆を持って共に子実を摘取り長閑なる時ハ野  
外にて楽き有様にそ見ゆる」という一節がある。これは男女の平等と共働を強調しようとした『七一雑報』らしい文  
章といえよう。

第五卷第八号（明治十三年二月二〇日）の「雑報」欄に見出しはないが、つぎの記事がある。全文を掲げる。

弊店（砂糖屋）へ或人砂糖を買に来りし所売子の誤りにて余計に掛渡したれば其人後に改めたれば余分ありとて態々返しに來ら  
れたり大概の人が砂糖などハ余計ありとて返しハせず。ダメツテ。ナメナサル。時勢なるに此人の如きハ実に感ずべき直人なれば  
賞載して呉とて丹波国福知山の福山堂より態々報知されたり当港などでもダメツテ。ナメソウナ人が多が此人の如きは記者も感心  
仕る

読者から『七一雑報』に記事にするよう依頼のあった事件であり、些細なことのようにであるが美談である。このよ

うな倫理性はやはりキリスト教の特色というべきであらう。

第五卷第三五号（明治一三年八月二十七日）の「雑報」の一つにつきの記事がある。全文を掲げる。

愛媛県下小豆郡豊島家の浦村に於て去る六月の下旬村芝居を興行せしが其節見物人の中に二百人ほど俄に腹痛を起し吐瀉する者がありて場中大騒ぎとなりしかは直ぐ医者を招きて夫々手当をなしたれば一人も命に別条ハなかりしか此原因ハ芝居小屋の前にて売る団子に塗たる緑青の毒にあたりし事と分りたるよし是ゆゑに口に入るものハ凡て氣を付ねばなりません

緑青は団子につける餡か餡を煮た銅鍋にでも生じていたのであらうか。これも結論に教訓がつけられている。

第六卷第五二号（明治一四年二月三〇日）の「雑報」には、摂津第一公会の初期会員市田左右太の美拳が報せられている。全文を掲げる。

本港元町三丁目の写真師市田左右太氏は此度新館を元町二丁目七拾六番地に築かれ来一月一日より開書せらるゝに際し花主たる中外幾千方の貴紳を悉く請待し酒肉を献ずるに由なきを以て其費金として金二百円を貧民癩癩の自存し能はざる者へ施与せられんと内百円を県庁へ五十円を神戸新報社へ五拾円を本社へ出し適宜の施与を托せられたり実には殊勝な美拳といふべし

現在でも開店祝にパーティを催し、顧客に酒食を振舞うことは慣例であるが、その費用をあげて社会救済に寄附したのは、とくに当時としては画期的なことであつた。「貧民癩癩の自存し能はざる者」は行政の上からも、また一般の人々からも顧みられることにはなほ少なかつた時代に、やはりキリスト者であつたからなされた行為であつたといわざるを得ない。また寄附が県庁と神戸新報社と雑報社に託され、一般紙の神戸新報社と雑報社が同格になつてゐるのは、『七一雑報』の神戸における新聞としての地位を窺わせるものがある。

第七卷第一七号（明治一五年四月二八日）の「雑報」に芸妓と遊船に関する記事がある。その全文を引用する。

大阪府下四区の芸妓と遊船の総数を調べし人の報知に上等税の妓五十六人下等税の妓一千百五十二人合計千二百八人にして遊船

は三千三百九十二艘なるがまだこれでも不足なりとて引続き造船の注文あるとハ浅ましき次第ならずや

最後の「浅ましき次第ならずや」にこの新聞の主張がある。

第八巻第二五号（明治一六年六月二十六日）は『七一雑報』としての終刊号であるが、「世事雑件」という欄につきの記事がある。全文を引用する。

近頃西京の陶器師の不景気なる実に見影もなき中に独丹山某ハ益々勵みて精巧品を仕入既に本年の春ハ三万円以上の品を持せて其次男を同国へ遣るとて昨今其用意中なるが其嘗て或人に答へし言に現今の世ハ人の事などを會議して空論に日を消すべきの時にあらず我ハ吾が業こそ肝要なれ日本が不景気なら外國へ担ぎ出して商する分の事なりと云しとぞ

『七一雑報』の特色の一つに海外との交流に関する記事の多いことがあげられるが、ここでも進取の氣象に富んだ陶器師のことがのべられている。そして「日本が不景気なら外國へ担ぎ出して商する」ことを肯定的にみており、この新聞のインターナショナルな思想を示しているといつてよいだろう。

以上が『七一雑報』における社会風俗的な記事の例である。これらは客観的な報道であるが、そこにつけ加えられた教訓やコメントにキリスト教的ないし倫理的、内面的な傾向があらわれている。この新聞の雑報的な記事の多くはコメントなしのものであるが、このような意見がのべられているところに、『七一雑報』の独自性があるといわねばならぬ。

## 六 週刊紙からキリスト教紙へ

『七一雑報』は当初、その名にふさわしく週刊誌的、百科全書的傾向が強く、文明開化思想の普及に努めていた

が、しだいにキリスト教の要素が増し、やがて名実ともに『福音新報』となる。その変化の過程をみていきたい。

まず明治八年（一八七五年）二月二十七日の第一号の内容は「雑報」として「ガラスのはなし」と他二篇の短文、「論説」、「投書」として前田泰一「リードルより翻訳」と「日本在留米国グリーン」の無題の文章、「養生の法」として「日本在留米国医別礼 各自の養生法」、それに「口上」である。なお「別礼」は J・C・ベリー (John Cutting Berry) のことである。

まず「ガラスのはなし」はガラスが二五〇〇年前にエジプトで発見されて以来の歴史と重宝な用途と強化ガラスの発明について記している。二篇の短文はサンフランシスコの金山に働く支那人が耶穌教を信じたという話と、神戸元町で病犬を見かけたが不浄だから処置してほしいという話である。「論説」には文明開化をはかるために、この新聞はできるだけわかりやすい、仮名まじりの文章で書きたいという趣旨がのべられている。「投書」の翻訳はシカゴのコンドイベルソンという日曜学校に通う少年が林檎を盗むことを強制しようとした悪童と勇敢にたたかって殺されたが、そのことによって人々に感化を与えたという話である。グリーンの文章は、文明を促がすために学問を盛んにすべきことを説いている。ベレーの「養生法」は清潔にすること、機嫌よくすること、食物・睡眠・運動に留意することといった一般論がのべられている。「口上」はさきに引用した創刊の辞である。

このように見てくると創刊号の記事中、キリスト教に関係があるのは、「雑報」の一つにある支那の労働者が耶穌教を信じ、報酬で教会堂を建てたということ、「投書」の一つにある悪童に殺された少年が聖書をよく読み、日曜学校に通っていたということだけである。その部分を引用すると前者は、「其中の一人が耶穌教を聞くと大いに信じ何卒して此真との教へを人に知らせ度ものとをもひ自分が働らいて得たる金にて会堂を立て一週間(一週)に四日と日曜日(一週)に二



度と其会堂にて教へをりしに聞もの凡そ百五十人斗り之ハ皆鉾山(ついで)を働らく支那人なりとぞ」である。

後者は「コンドハ平日聖書を読救主を愛し嘗てサバススクール（日曜日の学校）に欠席することもなく温順にして能物事を弁まへをれば人々皆コンドを教師と為すべく望みコンドも亦成長するときは伝道者となつて神の道に稼がんと望みしが」という僅かな記述である。しかもグリーンやベレーのような宣教師の文章も、まったくキリスト教に触れていないことは注目し得る。

ちなみに文明開化についての言及をみると、「論説」に「為になる教だの外国の模様だの先生方の論説だのを聴く<sup>き</sup>とが出来ませんでは文明開化の仲間はずれにて世間せまい斗りでなく」、「亦是僻<sup>へん</sup>ひの百姓衆でも此新聞をよんで開化の仲間入をなさる様にお願申します」とあるのと、「投書」のなかのグリーンの文章が「方今旧弊を洗除衆庶をして文明の智海に浴せしめんとする愛國の士此國に鮮<sup>すくな</sup>しとせず」に始つて、全体が文明を論じたものといつてよい。少なくとも文明開化に関する記述がキリスト教についてのものよりもずっと多く、この新聞を読んで文明開化の仲間入りをするよう論説において勧めていることからいっても、キリスト教精神に基づく文明開化思想を弘めることが初期の『七一雑報』の目的であつたといえよう。それはさききのべたようにO・H・ギューリックが米国伝道会社本部に宛てた手紙のなかで「啓蒙、文明化、キリスト教化」という順序で記していることを紙面に反映させたものであつた。

第二号（明治九年一月三日）には「雑報」として冒頭に「電信機の説」が電線の切断を示す挿絵入りで掲げられている。つぎに「近頃有名なアメリカ人ムデ氏の話」があり、米国会衆派の大衆伝道者D・L・ムーディ（Dwight Lyman Moody）の紹介がなされている。さらに『神戸新聞』の引用として兵庫港における軍艦の発着状況が書かれている。「論説」は「愛國の略説」という題で、愛國心は神を愛するところから起こると説いている。「投書」には横

浜在留の松山高吉が「燕石のはなし」と題して、宋の画家燕石を論じている。また「指輪のはなし」「イトルニチーのはなし」がデビスという署名で載っている。これはJ・D・デイヴィス (Jerome Dean Davis) のことである。なお「イトルニチー」には文中で「無限」の語が宛てられている。「養生法」は第一号に続いて「空気を通す事 別礼」となっている。このように第二号ではキリスト教関係の記事がやや増加している。

第三号(明治九年二月二日)は「雑報」に「ロシアの学校の事」、「トルコのはなし」、「ムデのはなし」二号の続きがある。「論説」の「両親の心え」に冒頭に「近ごろハ文明開化と云ことを津々浦々の童子までが口に唱る様になりましたが一体開化の本源といふ何でございませう吾輩のかんがへますには只教の開る事であらふと思ひます」とあり、両親は子供に智慧と行儀を教えよと説いている。「投書」は二つあり、一つは「童蒙十六ばなし翻訳 今村謙吉」として「ハーフコロン」の咄があり、拾った銀貨を落し主に返した善行が記されており、「己れ人にせられんとすることはまた人にもそのごとくせよ〔路伝六章の卅一〕」という聖書の言葉が引用されている。いま一つは「日本在留米國アッキンソン」(J・L・アッキンソン J. L. Atkinson) の文章で、馬車の貸賃をごまかした者が露見した話にことよせて、神は僅かな悪事をも見逃さないと教訓を記している。「養生法」は前号の続編で、「甦るはなし デベス」として、人間の肉体は七年毎に分子が一変するという話が書かれている。

このような形で続いていくが、初期の『七一雑報』では文明開化的話題とキリスト教的話題の比率はほぼ三対二であるといえよう。文明開化とキリスト教の関係については第一〇号(明治九年三月一〇日)の論説に「米國シカゴニテ沢山馬之進」の署名で、在米の沢山保羅が「耶穌正教は世を文明にするの基礎」を寄せている。その最初に、「夜中の暗きにも朝日の出るを待てのち明らかかなり万づの物その光沢を得て其生育を遂其の真の美きを顯はす夫れ人民の開

化世の文明に趣むくも亦この如し真の神の光沢ト詔命が其人の心を照すに非ざれば譬へ外に文明の律てを施こし開化の術てを行なふとも其人心を變ること能はず其風俗まで夷狄たるに過ず故に其大本たる耶蘇教の人心を支配するにあらざれば所謂当時文明国の長具たる文学なり政律なり器械なり商法なりたゞに姦匿を巧ましうし詐偽を蓋ふの具たるに過ず」とある。ここに文明開化の基礎としてのキリスト教という理念がよく表わされている。

『七一雑報』は明治九年（一八七六年）七月七日の第二七号からページ数を倍増し、八ページとなるに伴って記事の量も種類も増える。そして明治九年七月二八日の第三〇号から「官令」という欄が設けられて政府の布告などが掲げられる。また明治一〇年（一八七七年）九月二二日の第三八号から「教会新報」という欄がつくられ、個々の教会や教派を中心にした情報載るようになる。この「教会新報」はしだいに分量を増し、『七一雑報』がのちに『福音新報』と改題される伏線となる。

明治一一年（一八七八年）一月四日の第三卷第一号から巻頭に「目録」、すなわち目次がつけられる。その号の「目録」をあげると、「七一 新年の感」「雑報 数件」「教会新報 西京大坂神戸其他近傍の信者大坂に集會し事 昨十二月月上旬東京にて洗礼を受けし人数 耶蘇信徒の婚儀 クリストマス事 風説 神戸教会にて會堂の地所を買入たる事 三田教会より篠山に働きし事 明石伝道の景況 天主教板宿村に働きし事 信州上田教会のこと 東京親睦会より内国諸教会に送たる書簡」「雑話並に翻訳類 魯王の事 銚子を磨利すること 人造物を以て真神を証せしこと 信仰の花 救済義会規則書」「投書 基督教ハ卑屈の精心を養ふ者に非ず 耶蘇教の説 歳晩書感」。最初の「七一」というのは、さきの「論説」と同様の項目といつてよい。また、この目録の英語訳も巻頭に並べて掲げられている。この号あたりになると一般的記事とキリスト教の記事とがほぼ等量になっていることがわかる。そしてや

がてキリスト教關係が三分の二を占めるようになる。それでも挿絵による百科全書的な文物の説明は明治一四年（一八八二年）一月三〇日の第六卷第五二号まで連載されている。この年の一月、四号分の挿絵による説明の題を列挙すると、「ピレニウス山の奇巖」「西班牙の古水道」「蝦夷のアイノノ人種の図」「合衆国ニューヨークに運船したる大石碑の図」「ズルー人種家屋の図」と多彩である。この絵入り解説が明治一四年で終るところから、『七一雑報』の百科全書的、文明開化的性格はにわか減少するといつてよいだろう。

そして明治一五年（一八八二年）一月六日の第七卷第一号から「説教」という欄がつくられ、この号には「福音」と題して「羅馬伝<sup>(1)</sup>一章二、三、四節」による「神戸教会牧師松山高吉」の説教が載っている。こうなると、いよいよキリスト教紙の色彩が強くなった感がするが、しかし一般的な記事が別の題目で記されているものもある。この号の「目録」の大きな見出しだけをあげると、「官令」「七一論説」「教会新報」「海外実況」「叢談」「説教」「寄書」である。この「海外実況」は海外の情報であり、「叢談」は「略伝、風土記、農業、學術」といった記事である。

終刊の二つ前の号である明治一六年（一八八三年）六月一二日の第八卷第二三号からは「聖書の語」というコラムが巻頭に掲げられ、「心の貧き者ハ福なり、天国ハ即ち其人の有なれば也(馬太伝五章三節)」の解釈が載っている。「世事雑件」に週刊誌的性格が残っているが、「雑話」も「雪中に神の恩助を受く」である。その内容は「北海道の内村某といへる教の友」が「アイノ人」を伴って山中へ迷った時、山鳥が飛んだので銃を撃ったところ、その銃声が報せになって救助され、神恩に感謝したという話である。この「内村氏」は内村鑑三と考えられる。

最後に『七一雑報』の最終号である明治一六年六月二六日の第八卷第二五号を見よう。冒頭に「聖書の語」として「神は靈なれば拝する者も亦靈と真を以て之を拝すべき也(約翰伝四章二十四節)」についての解釈がある。つぎに

「世事雑件」として、安南における仏軍の敗北に仏議会が軍費支出を可決したこと、隅田丸が玄海灘で坐礁したと、板垣退助と後藤象二郎が帰朝し、出迎えが三百人あったことなど七項目の報道がある。「教会新報」は京都のキリスト教演説会の様子、東京新米教会の牧師石原保太郎が兵庫、神戸、多聞の三教会で演説をしたこと、新潟地方でキリスト教大親睦会があること、宮城県石巻における押川方義の伝道など八項目が書かれている。「庭訓雑話」には「響尾蛇の話」、「剛強決心」として宣教師が誘惑に勝った話、「婚礼の事」としてキリスト教の結婚式の説明がある。「論説」は「悪魔の火箭を拒ぐべし」として「以弗所書六章十六節」による説教的な話であり、「投書」は「サンドイッチの開化 其三 著明き聖靈の恩化」として、ハワイで宣教師の働きによって四年間に二〇、二九七人が受洗したことが記されている。

最終号は「世事雑件」の七項目と「庭訓雑話」の「響尾蛇の話」以外はすべてキリスト教関係の記事である。これらちよほど創刊号がキリスト教については僅かな言及があるのみで他はすべて文明開化を中心にした一般的な記事であったのと、まったく対照的である。内容からみて、まさに創刊号の裏返しが終刊号であるといえよう。このことは『七一雑報』が週刊紙からキリスト教紙へ、文明開化から福音伝道へと変転した軌跡をみごとに示しているといわねばならない。

## 結

『七一雑報』がその形態において、きわめて明確な週刊紙として発行された経緯と、内容においてキリスト教を基盤にして文明開化を啓蒙する新聞として出発しながら、しだいにキリスト教の色彩を強化し、伝道の意図をあらわに

示すようになった過程をさぐってきた。とくに後者はとりもなおさず、それがこの国におけるキリスト教の進展の反映であった。

およそ明治の初期、『七一雑報』創刊の頃のキリスト教、とくにプロテスタンティズムは独立した宗教であるよりも、文明開化の精神であったり、新しいモラルの規範であったり、近代思想の一典型であったりした。そこには、その後のキリスト教のありかたとは異って、文化、思想、倫理、社会問題などの密接、不可分なかわりがあったといわねばならない。

そして今日のキリスト教の状況を見るときに、それらの遠い過去のありかたが、いま再び受けとりなおすべき新しい課題として迫ってくるように思われてならない。というのも現在のキリスト教があまりに一般の社会や精神から離れたものとして存在しているからである。そしてキリスト者はそのことに気づかずにおられるほどに、キリスト教は一つの小さな世界をつくりあげてしまっている。

キリスト教がいたずらに文化や思想や社会とかかわることによって、自らの主体性や独自性を損ね、喪うことを危惧する考えもあるだろう。しかし、およそ宗教はそれ自体が発展し、繁栄するためには、己れをむなしくして他を生かすために存在しているのではないだろうか。それなら宗教の形態が消滅することは逆説的に宗教の内容がもっともよく開花することに通ずるといいたい。

そのような意味から現代のキリスト教が『七一雑報』の当初のありかたから学ぶべきことは多く、そしてその後の変容からもまた教えられるところは少なくないはずである。小論が『七一雑報』を週刊紙として探究したゆえんもそこにある。

付記 同志社大学人文科学研究所所蔵のアメリカン・ボード関係の宣教師書簡、および明治初期の新聞・雑誌に関する文献について同研究所教授杉井六郎氏から、また、明治維新前後のジャーナリズムについて同文学部教授岡満男氏から、それぞれ教示を受けた。記して感謝する。

- (1) 『キリスト教大事典』昭和三八年、教文館、四七五ページ。
- (2) 「てんど」天体の軌道上の運動をいう。
- (3) 内閣官報局編『法令全書』第五卷ノ一、昭和四九年、原書房、二三〇ページ―二三一ページ。
- (4) 前掲書、二三一ページ。
- (5) 内閣官報局編『法令全書』第五卷ノ二、昭和四九年、原書房、一二二―四ページ。
- (6) 内閣官報局編『法令全書』第六卷ノ二、昭和五〇年、原書房、一四五―五ページ。
- (7) 内閣官報局編『法令全書』第九卷ノ一、昭和五〇年、原書房、二九〇ページ。
- (8) 内田正男著『暦と日本人』昭和五〇年、雄山閣、一九六ページ。
- (9) 『旧約聖書』、「出エジプト記」第二〇章八節―一一節。
- (10) 服部一敏・茂木幹弘著『暦の読み方』昭和四四年、日本実業出版社、六〇ページ。
- (11) 前掲『暦と日本人』一九七―一九八ページ。
- (12) 『幕末明治新聞全集』第二卷、昭和九年、大誠堂、三ページ―一ページ。
- (13) 鈴木秀三郎著『本邦新聞の起源』昭和三四年、西北書店、一七〇ページ―一七一ページ。
- (14) 山本文雄著『日本マス・コミュニケーション史(増補)』、昭和五六年、東海大学出版会、八ページ―九ページ。『明治文化全集』第一八卷(昭和三年、日本評論社)の五七五ページには「明治二年十月廃刊」となっている。
- (15) 『幕末明治新聞全集』第六卷上、昭和三六年、世界文庫、一ページ―六ページ。
- (16) 『明治文化全集』第一八卷、昭和三年、日本評論社、五七六ページ。
- (17) 『明治前期書目集成』第一分冊、昭和四六年、明治文献資料刊行会、一八六ページ。
- (18) 前掲『明治文化全集』第一八卷解題一二ページ―一三ページ。
- (19) 前掲『日本マス・コミュニケーション史』、三三三ページ。
- (20) 『日本近代史辞典』昭和三年、東洋経済新報社、七八

○ページ七八一ページ。

- (21) 前掲『明治前期書目集成』一八三ページ。  
(22) 前掲書、一八四ページ—一八九ページ。  
(23) 『マス・コミュニケーション事典』昭和四六年、学芸書林、三二一ページ。  
(24) 『出版事典』昭和四六年、出版ニュース社、一五九ページ。  
(25) 『国民百科事典』第六卷、昭和五二年、平凡社、五二七ページ。  
(26) 『新キリスト教辞典』昭和四〇年、誠信書房、一六七ページ。  
(27) 村上俊吉著『回顧』大正元年、警醒社書店、九二ページ。  
(28) "O. H. Gulick's Letters" January, 1876.  
(29) *ibid.*, January 18, 1876.  
(30) *ibid.*, June 10, 1875.  
(31) Ots Carry, A History of Christianity in Japan, 1976, C. E. Tuttle co. P.122. (1st published in 1909)  
(32) この『福音新報』は『七一雑報』が改題されたものではなく、植村正久が明治三三年三月一四日に創刊した『福音週報』を明治二四年三月二〇日に改題して発行したもので、植村の死後も昭和一七年九月二四日まで続いたキリスト教週刊紙で、日本基督教会の機関紙でもあった。
- (33) 佐波巨編『植村正久とその時代』第三卷、昭和一三年、教文館、四〇四ページ—四〇五ページからの引用。  
(34) 徳富猪一郎著『蘇峰自伝』昭和一〇年、中央公論社、一一二ページ。  
(35) 前掲『回顧』七八ページ。  
(36) 加藤秀俊他著『追補・明治大正昭和世相史』昭和四七年社会思想社、六四ページ。  
(37) 前掲書、一〇三ページ。  
(38) 西松五郎『神戸又新日報』略史』（『歴史と神戸』第一八巻第二号、昭和五四年四月、神戸史学会、所収）によれば『神戸新報』は明治一三年二月一七日創刊の政論新聞で、当初週二回、のち隔日刊、明治一四年六月から日刊となり、社主安倍誠五郎、代表三木善八、主幹鹿島秀麿であったが、明治一六年二月九日付で発禁処分を受け、のち明治一七年五月一日に創刊された『神戸又新日報』に合併された。